

マネジメント!マネジメント!

澤 由紀子(本学教職研究科准教授)

今回改訂された学習指導要領は、2017年、2018年告示後、移行期間を経て小学校では2020年度から、中学校では2021年度から全面実施、そして高等学校では今年度の2022年度から年次進行での実施となった。2年後の2024年度で全学年に行きわたることになる。改訂は同時期に進められていた高大接続改革とも相俟って、「明治以来の大改革」とも言われるほど大きな変革を求めるものであった。主なポイントとしては、①社会に開かれた教育課程、②育成を目指す資質・能力、③カリキュラムマネジメント、④「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善、の4つが挙げられていた。確かにこれらすべてを実現に向けて取り組むことになれば、大きな変革をもたらすかもしれない、と、少しわくわくする気持ちがあったことは否めない。ただその中で、③のカリキュラムマネジメントについては、なんとなく違和感を覚えたのである。

カリキュラムマネジメントとは、総則によれば、「子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する学校教育目標を実現するために、教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育課程の質の向上を図っていくこと(総則第1-4)」である。その通りである。ただ、この文言のどこをとっても新しい要素がないように思えたのだ。もともとカリキュラムとはマネジメントするものではないのか…。学校における教育活動とは、言われるまでもなくカリキュラム(教育課程)のマネジメントそのものではなかったのか…。目新しいと言えば、「複数の教科等の連携を図りながら授業をつくる」という点であるが、この言葉にそこまでの意味を持たせるというのだろうか…。なぜいま「カリマネ」などと、いかにも流行り言葉のように広める必要があるのだろうか…。あたり前のことを今改めて見直そう、ということなのだろうか…。

こんなことを考えていると、ふと、私たちは「マネジメント」という言葉をどのように理解しているのかと思う

に至った。

高校の英語教師であった私は、manage という単語を教える際、語源がイタリア語の maneggiare であり、それは「野生馬を馴らす」、「手で扱う」という意味であったことを知った。それが転じて英語の manage 「物事をうまく扱う」という言葉となったそうである。単に「管理する」「経営する」だけではなく「何とかして、どうにかして」という意味合いが含まれ、日本語にぴったり当てはまる言葉がなかったため、教室での説明にも工夫が必要であった。当時先輩の先生が「部活動のマネージャーはいつも何とかしてみんながうまく活動できるように工夫してくれているだろ?」と言ったことに妙に説得性があり、私もその説明を拝借したことを覚えている。(それから30年近く経って『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』(通称『もしドラ』)がベストセラーとなった時、図らずも当時のことが思い出されたのである。)

さて、世の中はマネジメントが付く言葉であふれているが、教育関係においても同様で、カリキュラムマネジメントだけでなく、学校組織マネジメントや、危機管理としてのリスクマネジメント、クライシスマネジメント、自己管理としてのタイムマネジメント、アンガーマネジメント、アンコンシャスバイアスマネジメント、等々を目にする。いずれにしても何らかの困難を抱えながらも「何とかして、どうにかして」乗り切るというイメージがありはしないだろうか。

それにしても「英語は英語で教える」時代であるにもかかわらず、怒涛の如く押し寄せる英語の概念をカタカナにして受け入れている、という状況には一抹の矛盾、あるいは中途半端さを感じざるを得ない。ただ、それらが先述のカリキュラムマネジメントの定義のように、純粋な英語の意味だけでなく、日本の、その時代の事情が盛り込まれた「特別な」言葉である、というのならまた話は別なのだが。